救いが必要です

使徒の働き

2021/2/28

キリスト教は救いの宗教です。その基盤となっている聖書も、救いの本です。キリスト教が教えるのは、人間には救いが必要であること、また救われるために、人間は何をしなければならいかということです。キリスト教はその教えの基本を、聖書から見つけ出しています。聖書の理解のしかたによって、いくらかの色合いの違い差は出てきますが、正統的なキリスト教はみな救いを説いているのです。

今日はその救いについて、もう少し深く学び、神様に対する感謝の気持ちを深めて行きたいと思います。

Ⅰ.　悪魔の支配からの救出　キリストが最も強調した教え、中心的主題は、神の支配です。翻訳の都合で、普通は「神の国」と訳されていますが、正しくは「神の支配」という意味です。その神の支配に対峙するのが「悪魔の支配」です。その悪魔の支配の下にある世界を、キリストは「この世」、もしくは「この代」と表現し、私たちが生きている今のこの世界が、悪魔の支配にあることを教えておられます。

キリストが教えられたのは、悪魔が支配するこの世界に、神の支配を打ち立てるということです。神の支配が最終的に悪魔の支配を完全に打ち破って、神のみ心にかなった神の国が設立され、人間がその神の支配の中、神の国に招き入れられるということです。

この神の国を打ち立てる働きは、三つの面に分けて考えることが可能です。それは人間の救いと、自然界の救いです。自然界の救いは、人間の生きる環境の救いも伴っていることをい、いしています。そして、人間の究極的な救いです。この二つ以外に、究極的な救い、本来の救いがあります。

Ⅱ.　人間の救い　人間が救いを必要としているのは、人間には病と死があり、常にそれらの存在から来る恐れにさいなまれて生きてということです。どれほど科学が進み、医学が発達しようが、決して逃れられない恐怖です。

それだけでなく、人間はあらゆる解決不可能で、深刻な問題に取り囲まれています。貧富の差、人種の差、文化の差、男女の差、障害者と健常者の差、その他ありとあらゆる差が単なる

差ではなく、格差となり、さらには差別となって人間を苦しめています。

人口の問題、特に発達途上国の貧しい人々の爆発的増加と食料の不足、エネルギーの枯渇と環境汚染、温暖化と気候の変化などは、刻々と限界に近づいているにも関わらず、人間は解決を見いだせないままです。世界はますます混乱し、劣化する可能性が高まります。

ここ1年あまりは、コビッド19の問題が世界を恐怖で覆い、経済的混乱と政情の不安定が深刻です。感染者の隔離は人間性を根底から揺るがし、親子、兄弟、家庭の社会生活を破壊し、取り返しがつかない状況に来ています。コビッド19はエピデミックとしては弱小のものです。同じコロナウイルス系のものとしては、スペイン風邪に遠く及びません。ましてや黒死病と呼ばれたペストの悲惨さには遠く及びません。まだまだ深刻な疫病も想定されるのです。

人間が生きる環境が悪化すると人心も悪化します。愛が冷えるのです。人間の社会生活への関心が混乱し、個人主義、自分勝手主義が多くなり、人権という名の我儘が高まり、互いが互いを赦すことができなくなり、寛容と忍耐が薄れてしまいます。LGBT の問題が止めどなく深刻さを増し、通常の人間生活が困難になります。これからの社会は、ソドムとゴモラの様相を帯びていきます。

それらに加えて戦争の問題があります。科学が進み、人心が平穏になれば、世界は平和になるという楽観論は、もう通用しません。20世紀は、戦争による死者が最も多い世紀でした。21世紀はそれを越すと考えられています。

人間はこれらの問題と闘い続けて来ました。これからも戦い続けることでしょう。しかし、人間の力には限界があります。人間の手によらない救いがなければ、人類の未来はありません。人間の救いは、神の国に招き入れられることであり、この世界からの救いであり、永遠の命に至るものです。

Ⅲ.　自然界の救い　人間が住んでいるこの自然界も、悪魔の支配に陥っています。神が創造された、美しく調和のとれた世界は、秩序が失われ、捻じ曲げられ、破壊されています。天災が次々と襲来しています。

地球規模の災害、大天災が起こる可能性が残っているのです。マントルの移動による地殻変動、そこからくる地震や火山活動による災害は、今の人間の科学では対応のしようがありません。（マントルの移動による地殻変動は、最近の科学では否定される傾向にありますが・・・）日本は地震の多い国です。関東大震災に匹敵する、都市型地震が予告されて随分たちます。東海地方も、四国地方も、九州の東沿岸から奄美列島、東北・北海道の太平洋岸も、いつ大地震

に襲われても不思議ではありません。数十万、数百万の死者が予測されているのです。世界には日本のように地震の多い地域がいくつもあります。

　それだけに止まらず、私たちの環境には宇宙環境があります。宇宙がもたらす脅威には、人類はまったく防御のすべを持っていません。直径数十キロメートルの小惑星、ちょっと大きめの太陽系のゴミが地球にぶつかるだけで、恐竜が滅びてしまったと言われています。イエス様は、太陽が光を失い星が落下する天変地異を予言しておられるのです。

　パウロはこの自然が神の贖いに含まれ、救われること、完全にされることを予言しています。ヨハネはこの世界が神の手によって滅ぼされ、新しい天地が創造されると教えています。その新しい創造、新天新地がどの範囲まで及ぶことなのかは不明ですが、この自然界は新たに造り変えられるのです。人間の救いはこの世界からの救いであり、「あらたにつくりなおされる」と表現されるほど素晴らしいものですが、人間の住む自然界の救いは、一度完全に破壊され、新しく創造される救いです。人間の救いは、人間の住む自然界の救いが無ければ、完成されないあのです。

IV.　究極的救い　　神様がお造りになった自然と、そこに住まわせられた人間の最初の姿、いわゆる堕落前のエデンの園での姿を、思い浮かべてください。ここにあったのは、染みも傷もない完全な人間と、何から何までがことごとく調和した自然です。でもそれだけではありません。神様との隔てない交わりがあったのです。

　神の御姿に似せて造られた人間には、神様と語り合い、心を通じ合うことが出来る性質が与えられていました。霊的な性質の頂点の部分です。人間の幸せと喜びは、ただ充分に食べ、互いに愛し合い、家族を作り、共同体を形成し、豊かな自然に包まれて生きることだけではありませんでした。神との心の交流があってこそ、人間だけに与えられ、人間だけに許された生き方があり、幸せがあり、喜びがあったのです。人間にこの霊的動物としての救いが欠けていたならば、それは究極的には救いにはなりません。

　今の私たちの生活には、神に対する賛美があり、感謝があり、祈りがあります。しかし、今の世界の中では、それらは様々なものに妨げられて、はなはだ不完全です。そこに、神様が与えて下さった、異言による祈り、異言による神への語りかけという、特別な賜物があります。

　私たちの教会は、ペンテコステ派の教会として世界最大で、今も非常な勢いで成長しています。そして異言はその力の源である、聖霊のバプテスマが与えられた証拠であると考えます。その結果、大切なのは聖霊のバプテスマであって、異言ではないと主張して、しばしば異言を軽んじた発言をします。

　ところが、私の聖書理解では、この異言の賜物こそ、人間の言葉の限界を超え、感情の表現の淀みと言うか障害を越え、滞りなく自分を表現できるようにする、神の恵みの賜物なのです。そしてその恵みに与り、神との深い深い交わりを経験したものは、その喜びと感動のあまりに、歌いだしたり、泣きだしたり、笑いだしたり、転がったり、走り出したりすることもあるのです。使徒行伝の二章に書かれえいる通りです。

　そしてこの恵みを体験した者は、神との交わりの素晴らしさに感動し、神の臨在と力に勇気を与えられ、大胆に福音を語り伝えていくことになるのです。そしてこれはパウロが明らかに語っているように、すべての信徒に与えられるように、準備されている祝福なのです。私たちの教会も、この祝福に与ることが出来るように、祈り求めて参りましょう。

　でも、異言によるより自由な、隔てない神との交わりは、この不完全な世界における賜物です。永遠の命というのは、この賜物が全ての信徒に与えられて、何の妨げもなく、神と語らい、神を褒め称えることに、無限の、そして無上の喜びを感じることなのです。救いは永遠の救いです。この永遠はただ、時間の長さだけではなく、その時間の質にも及ぶのです。